V. Ia. プロップ：民話研究における構造と歴史（I）

谷口　勇訳

『民話の形態論』という本は1928年ロシア語で出版され[1)]，当時二つの反応を巻き起こした。一方では，かなりの民俗学者，民族学者および文学研究者たちが，これを好意的に受入れたが，他方では，著者は形式主義だと批難されたし，この批難は今日まで，再三繰返されてきた。おそらく，他の多くの書物と同じように，本書も忘れ去られてしまったことだろうが，たまたま戦後数年経って再発見されたとき，専門家たちから例外的に想起されるところとなったのである。国際会議において，本書のことが語られたり，書かれたりし始めたし，英語訳が出版された[2)]。いったい何が生じたのか，またこの喚起された関心はどう説明できるのか？　精密科学の分野では，極めて重要な発見がなされてきたが，それは，より一層厳密な新しい研究方法や計算方法を用いることによって可能となったのである。精密な方法を用いようとする渇望は人文科学にも波及した。構造言語学や数理言語学が現われたし，他の諸学がその後に続いた。これらのうちのひとつが理論詩学である。そこで，この本が書き上げられた時代には，今日もろもろの学問が使用している一連の概念や術語がまだ存在していなかったにも拘わらず，本書の中では，すでに記号体系としての芸術なる概念や，形式化・モデル化の手法や，数理計算を用いる可能性が，先んじて実行されていたということが判明した次第なのだ。そして再びこの著者は二つの相異なる形で評価されたのだった。本書は或る人たちにとっては，より精密な新しい方法を探索するのに有益かつ必要であったのに反し，他の人びとは，すでに過去においてもそうであったように，これを形式主義だと批難し，しかも何らの有効な知識も供し得ないものと考えていたのである。

後者のなかには，クロード・レヴィ＝ストロース教授も入っている。かれは著名な構造主義者だが，しかし構造主義者たちもまた，しばしば形式主義だと批難されている。構造主義と形式主義との相違を明らかにせんがため，レヴィ＝ストロース教授は本書『民話の形態論』を例に採り上げ，これを形式主義的取組みだと見なしている。かれの論文「構造と形式。ウラジーミル・プロップの一著作に関する省察」[3)]は，『形態論』のこの伊語版の中に収められている[4)]。かれが正しいか否かの判断は読者にかかっている。しかし攻撃されれば防衛するのが当然だ。相手の議論が間違っていると思えるならば，これに対して，より正確であることを示し得る反論を出すことができる。更に，かかる論争は一般の学問的興味を提供するかも知

---

1) V. Propp, *Morfologija skazki*, Leningrad, 1928. 増補改訂第２版が1969年，モスクワのナウカ社より刊行された。〔訳注〕

2) V. Propp, *Morphology of the Folktale* 〔Edited with an Introduction by Svatava Pirkova-Jacobson, Translated by Laurence Scott, Bloomington, 1958. Second Edition, Revised and Edited with a Preface by Louis A. Wagner, New Introduction by Alan Dundes, University of Texas Press, Austin-London, 1968〕.〔訳注〕

3) La Structure et la Forme. Réflexions sur un ouvrage de Vladimir Propp, in: ≪Cahiers de l'Institut de Science Économique Appliquée≫, n° 99, mars 1960 (Série M, n° 7. この論文は，＜L'analyse morphologique des contes russes＞なる表題で，オランダでも公表された（≪International Journal of Slavic Linguistics and Poetics≫, III (1960), Mouton & C., s' Gravenhage）〔原注〕

4) Claude Lévi-Strauss, La struttura e la forma. Riflessioni su un'opera di Vladimir Ja. Propp, in: *Morfologia della Fiaba*, Torino, Giulio Einaudi editore, 1966, pp. 163-99. 西語訳（*Polemica Claude Lêvi=Strauss-Vladimir Propp*, Madrid, 1972, pp. 7-45 所収）もある。〔訳注〕

れない。それ故，この論文への回答を準備するように，とのエイナウディ出版社の勧告を，私は喜んでお引受けした次第である。レヴィ=ストロース教授は私に挑戦した。それで私はこれを引受けることにする。こうして，『形態論』の読者たちはわれわれの決闘の立会人となるであろうし，そして一方が勝利者であるとするなら，読者はそう思う論争者を支持することができるであろう。

レヴィ=ストロース教授は私に比べて，哲学者であるという，極めて本質的な強みを持つのに反し，一方，私は単に一介の経験主義者であり，しかも何よりもまず事実を注意深く観察し，これを周到かつ組織的に研究し，自己自身の諸前提を検証したり，また論究の各相における状況を再検討したりする，完全な経験主義者である。ところで，経験科学にも色々なタイプのものがある。ある場合には，経験主義者は特徴的な要素を記述したり，個性化したりするだけで我慢するかも知れないし，また我慢せねばならない，――特に研究対象がひとつの遊離した事実であるならば。こういった記述は，正確に書かれているのであれば，確かに科学的価値がない訳ではない。だが一連の事実や，これらを結びつけている諸関係を記述したり，研究したりするのであれば，その時には，かかる記述はひとつの発見――もはや単に特殊な興味を有するだけでなく，哲学的考察へも開かれる発見――に変貌する。私の著書もまた同様な考察を誘発しているが，しかしかかる考察は若干の章の冒頭にある銘句の中に示唆されているだけである。レヴィ=ストロース教授はただ英訳でのみ拙著を知っているのであるが，しかしこの英訳者は許し難い放縦をしでかしたのである。一見しただけでは本文と関連があるようには見えない銘句の機能を全く理解しなかったため，訳者はこれを無用の装飾と判断し，乱暴にもこれを抹消してしまったのである。ところがこれらの銘句はすべて，ゲーテが『形態論』という共通の表題の下に纏めた，かれの一連の労作およびかれの日記から抜粋されたものなのであり，そして本文中には語られていないことを明示する目的を持っていたのである。一切の学問の最高の目的は法則の発見にある。単なる経験主義者がばらばらの事実しか見ない場合でも，経験主義者=哲学者は，ある法則の反映を認識する。私はごく地味な領域で，民話の諸類型のひとつに対して，法則を個性として付与したが，しかしその時すでに，私にはこの法則の発見が，より一般的な重要性をも持ち得るものと思われたのである。«モルフォロギア»なる術語そのものにしても，分類をその主要目的とする植物学の手引書から採られたのでも，文法概説から採られたのでもなくて，この表題の下に，植物学や骨学に関する書き物を集めた，ゲーテの諸作品から採られたものなのだ。この術語をもって，自然を貫く諸法則の研究における新開拓を，われわれはゲーテのうちに発見するのであり，またゲーテが植物学から比較骨学へと移行したのも偶然ではないのである。われわれはこれらの作品を構造主義者たちに熱心に推薦することができる。そして，ファウストに変装して，骸骨や遺骨や植物標本で取巻かれた，塵まみれの実験室に坐せる，青年ゲーテが，これらのうちに粉塵しか見ないとすれば，自然科学の分野における精密な比較方法に慣れた壮年ゲーテは，諸事物を，統一ある全体全自然を貫く一般大系と見なしているのである。だが，詩人および科学者という二人のゲーテは存在しない。知識を熱望する『ファウスト』のゲーテと，知識に到達した博物学者ゲーテとは同一人物なのだ。銘句はまた他の意味をも有する。つまり，自然界と人間活動の世界とは相互に遊離しているのではないのだ。両者を結びつける何かがあり，類似の方法で研究可能な，両者に共通の法則が存在する。こういう考えは，当時せいぜいあらましを述べたに過ぎないが，今日では上述の人文科学の領域において，精密な方法の探究の基礎になっている。構造主義者たちが私を支持してくれた理由のひとつはここにある[5]。他方，かれらのうちの或る者は，私の目的が広範な一般化――その可能性はまさしく銘句の中に示唆されているが――に到達することではないこととか，この仕事が単に民俗学者としての私の専門活動の一部であることを了解しなかった。だから，レヴィ=スト

5) たとえば，Alan Dundes, The Morphology of North-American Indian Folktales, in : ≪FFC≫, no. 195, Helsinki, 1964. この冊子の中には，レヴィ=ストロースの思想についての詳細な批判的解説がある。〔原注〕

ロース教授は，どういう訳で私が私の方法を民話に適用するように駆り立てられたのか，と当惑をあからさまにしながら，二回も自問しているのである。その理由はいくつかあると考えて，かれ自ら，それらを読者に説明している。その理由のひとつは，私が民族学者でなく，またそれ故，私は自分が知らぬ神話資料に頼ることができないのだということで示されている。更に，私は民話と神話との間に，実際的関係が介在するという考えを微塵だに持っていない（pp. 16, 19）[6]。要するに，私が民話を研究したということは，私の狭い学問的視野のせいである。なぜなら，さもなくばきっと私は自分の方法を，民話においてではなく，神話において実験したであろうから。

こういう議論（「著者は神話を知らぬものだから，民話を調査しているのだ」）の論理に拘泥するつもりはない。この論理は私には脆弱に思える。しかし私は，いかなる学究に対しても，かれに他のことを推めるために，あることに従事するのを禁止することはできないと思う。こういう論議から推測されるとおり，レヴィ＝ストロース教授はついでこう考える，――学究はまず方法を発見し，そしてその後で初めて，それをいかなる現象に適用できるかを自問し始めるものだが，われわれの場合には，かれ〔プロップ〕はそれを，なぜだか解らぬが，民話に適用しているが，こういうことは余り哲学者に関心を起こさせないことだ，と。だが，学問の分野では，ことはそんな風には断じて運ばないし，私の場合も，事態はそんな風ではなかったのである。万事展開の仕方が大いに異なっていたのだ。ツァー〔ロシア皇帝〕時代のロシアの大学は，文学研究の分野で文献学者たちの下準備をほとんど気にかけなかった。特に民衆の詩は完全に無視されていた。この空隙を埋めるため，私は大学を終るに際して，アファナーシェフの著名なコレクション[7]の研究に専念したのである。継娘の迫害を共通主題とする一連の民話において，私はひとつの興味ある事実に気付いた――つまり，霜の精の話（ソヴェト版の数字では95番目）の中で，継母はその継娘を森へ，霜の精のいるところへ追いやる。後者は彼女を凍らせようとするが，彼女がこの精に非常に優しく辛抱強く服従するものだから，彼女を許し，償いをして，立去らせる。これに反して，老婆の実の娘は試練に堪えられないで，死ぬ。つぎの話では，継娘はもはや霜の精には遭遇しないで，森の精に出会う。そして，その後の話では，熊に遭遇している。しかしそれでも，同じ民話なのだ！　霜の精，森の精，熊がおのおの，それぞれのやり方で継娘を試練にかけ，そして償ってやるのであるが，しかし行為の展開は同一である。不思議なことに，誰しもそのことには気付かず，アファナーシェフや他の人びとは，これらが別個の民話だと考えていたのである。霜の精，森の精，熊が同一で行為を異なった形で遂行していることは歴然としている。アファナーシェフにとっては，そこに別個の登場人物が現われているが故に，これらは別の民話なのであるが，それに反して，私には，主役たちの行為は同一であるが故に，これらは同一の民話だと思えたのである。こういうことがすべて私の興味を掻き立て始め，そこで私は，主役たちが演じている行為の観点から，他の民話をも研究し出したのである。このように，抽象の結果ではなくして，資料分析の結果が，民話研究のごく単純な方法――登場人物たちの容姿を別にして，かれらが遂行する行為に基いた研究法――のもとになったのであり，これらの行為を指示するために《機能》なる術語を採用したのである。迫害を蒙った継娘の民話に関しての考察が，撚り糸をつかみ，もつれ糸をほどくことを可能にした糸口だったのだ。その他の結構もまた，機能の反復可能性に基いていること，そして帰するところ，魔法民話の結構はみな同じ機能に基いており，これらの民話はすべて単型の構造を有すること，を確認することができたのである。

だが英訳者が，ゲーテから抜粋された銘句をはぶくことによって読者に不十分な奉仕をなしたとすれば，本書を刊行したロシアの出版者もまた，著者の意図を不自然に歪めてしまい，元来本書のタイトルは『魔法民話の形態論』であったのに，これを変更してしまったのだ。この書物がよ

---

6) 伊訳，pp. 179, 182〔西訳，pp. 23, 27〕

7) アレクサンドル・ニコラエーヴィチ・アファナーシェフ（1826―71）。歴史家，文学史家にして民俗学者。その著『ロシア民話集』八巻はかれの声価を高めた。抄訳として，金本源之助訳『ロシアの民話』（岩崎美術社，1972）がある。〔訳注〕

り広範な関心を生じさせんがために，校正者が«魔法»なる語を抹消したのである。このため読者（なかんずくレヴィ=ストロース教授）をして，本書の中では，文学ジャンルとしての民話の一般法則が探究されているものと誤って信じさせる破目になった。このようなタイトルを持つ本だったならば，『呪文の形態論』，『寓話の形態論』，『喜劇の形態論』などのタイプの一連の研究の中に入ることができたであろう。しかし著者は民話そのものといった，多様で複雑なジャンルの全類型を研究するつもりは毛頭なかったのであって，ただそれらのうちのひとつの類型だけ，つまり，他のすべての類型とはひどく相違している，魔法民話のそれを，しかも民間説話のそれだけを検討に付したのである。従って，これは民俗学の特殊な問題にさし向けられた特殊研究なのだ。登場人物の機能に基いた，叙事的ジャンルの分析法が，魔法民話の場合だけでなく，他のタイプの民話の場合にも，そして恐らくは，世界文学中の叙事的性格を有する諸作品の研究においても，有効だと判明するかも知れぬということは，別問題なのだ。しかしこれらの場合のいずれにおいても，具体的な結果は大層異なるであろうことは，容易に予見できる。たとえば，果てなし民話は，魔法民話の原理とは全く異なった原理の上に組立てられている。これは英国の民俗学ではおきまり話（formula-tales）と呼ばれており，そしてそれが土台にしている定式の型は確認され，規定され得ようが，しかしこのように同定された図式は少しも魔法民話のそれには対応しないであろう。だから叙述の型は異なっていても，やはり同じ方法でもって分析にかけ得るものが存在しているのである。レヴィ=ストロース教授は，私が到達した結論は，ノヴァーリスやゲーテの民話，また一般に文学的起源を有する人為的な民話には適用し得ない，と断言したとき，私の言葉を引用しており，そしてその場合，この結論は間違っていると考え，私に対し，この言葉をつき返している。だが，私は結論は全く間違ってはいないのだ。ただ，私の著名の批評家がそれに付与しようと欲しているような普遍的性格を有してはいないだけなのだ。方法は沢山あるがそれに反して，結論はフォークロア的叙事芸術という特定の類型にとってのみ有効なのであり，上の結論はまさしく後者の分析にその起源を負うているのである。

レヴィ=ストロース教授が私にさし向けている批難のすべてに答えることはしないで，最も重要な若干の批難にだけ心を留めることにしたい。これらの批難が事実無根だということになれば，これらから派生した，余り重要でない他の批難は，その根底から崩れ落ちることであろう。

主たる批難は，私の著書が形式主義的な試みであり，そしてこれだけでもすでに，有効な知識を供することはできぬのだ，ということにある。形式主義をもって何と解するのか，その正確な定義を，レヴィ=ストロース教授は与えていない。教授はそれの若干の特徴については，議論を進めてゆくうちに言及を行いながら，指摘するだけに留めている。それらの特徴のひとつは，形式主義者たちが歴史に言及せずに，資料自体を研究しているということにあるのだろう。レヴィ=ストロース教授はまたも，私にかかる形式主義的非歴史的方法を帰しているが，しかしそれからは，一見したところ，かれの厳しい見解を少々和らげようとしたのか，私が『形態論』を書いた後は，形式主義や形態論的分析を放棄して，神話，祭式，制度と，口碑文学（かれはフォークロアをこう呼んでいる）とを結びつけている諸関係の歴史的・比較的研究に専念した，ということを読者に知らしめている（p. 4）[8]。だが，かれはそれがどの研究のことなのか，明記してはいない。それどころか，私は拙著『ロシア農村の祭り』(1963)[9]では，まさしく『形態論』におけると同一の方法を用いて農村の主要な祭りはすべて，同じ要素——組織は異なっても——から成立っていることを確認するに至ったのである。けれどもこの著書はまだレヴィ=ストロース教授の知るところとはなり得なかったのだから，氏は明らかに，1946年に発刊されエイナウディ出版社からイタリア語で出版された拙著『魔法民話の歴史的根源』[10]に言及している

8) 伊訳，p. 166〔西訳，pp. 9f.〕
9) *Russkie agrarnye prazdniki*. 大木伸一訳『ロシアの祭り』(岩崎美術社）がある。〔訳注〕
10) *Istoričeskie corni volšebnoj skazki*. 伊訳 *Le radici storiche dei racconti di fate*. Einaudi, 1949.〔新版 (Editore Boringhieri, 1972) には，A.M. Cirese による序文が付されている。他に，ルーマニア語訳(1973)，西語訳(1974)が出た〕

のだ。しかしもしかれがこの本に一瞥を与えたとすれば，この本が『形態論』の中で展開されている諸命題の説明で始まっており，そして魔法民話が結構との関係ではなくて，その構成との関係で規定されていることに気付いたであろう。実際魔法民話の構成の一致がひとたび確認されるや，私はその原因が何なのか，と自問せずにはおかれなかったのである。この原因は内在的な形式的法則のうちに在るのではなく，歴史の初期の相の中に，つまり，ある人びとが好んで言うように，先史のうちに，すなわち民族誌学や民族学の研究対象たる，人間社会の発展段階のうちに探し求められるであろうことは，初めから私には明瞭なことだったのである。レヴィ=ストロース教授が，形態論は直接的にせよ間接的にせよ，民族誌学のデータ（observation ethnographique, p. 30）[11]をもって完全にされなければ不毛である，と断言するとき，全くもっともである。まさしくこのために，私は形態論的分析を放棄したのではなくて，魔法民話の結構の比較研究によって私に判然となった，あの体系の歴史的起源や根底の詮索に着手したのである。『形態論』と『歴史的根源』は，いわば浩瀚な著作の二部ないし二巻を表わしているのだ。後者は前者から直接派生しており，前者は後者の前提なのだ。レヴィ=ストロース教授が，形態論的研究は「歴史的探究に結びつけられる」（p.19）[12]と断言するとき，私の言葉を引用しているが，しかしかれはまたもこれを私につき返そうとしている。実際，『形態論』の中にはかかる探究が現われていないという限りでは，かれは正しい。しかし，かれはこの言葉が一定の原則の表明であるということを過小評価したのである。更にこの言葉は，かかる歴史的探究を将来遂行するという約束を表わしているのであり，そしてまた，たとえ何年後のことであろうとも，それでも私が真面目に支払ってきた借金でもあるのだ。従ってかれが私は「形式主義的迷妄」（vision formaliste）と「歴史的説明なる固定観念」（l'obsession des explications historiques,p. 20）[13]との間で引裂かれている，と書いているとすれば，それは明らかに間違っている。現に私は可能な限り，方法および統一に最大の厳正さを期して，もろもろの事象・事実の科学的記述から，それらの歴史的起源の説明へと移ったのである。こういったすべてのことを知らしめに，レヴィ=ストロース教授は，私が歴史的探究に専念するため形式主義的観方の放棄へ私を駆り立てたかも知れぬ後悔さえも，私に負わせている。だが実際，私は何の後悔も感じていないし，また良心の苛責を微塵も感じていないのである。レヴィ=ストロース教授は同じく，民話の歴史的説明は実際上不可能だ，「なんとなれば，民話を生んだ反歴史的文明について，われわれはほとんど知らないのだから」（p. 21）[14]と考え，そして更に，比較のためのテキストの欠如を嘆いている。ところが問題はテキストにあるのではなく（なかんずく，テキストは絶対に充分な量が存在している），もろもろの結構が，人間社会の初期の発展段階においては，民衆の生活や慣習から，またそこから派生した思考形態から，その起源を引いているという事実，それに，これらの結構の出現が歴史的必然に呼応しているという点にこそ問題があるのだ。確かに，われわれはまだ民族学の知識は乏しいが，それでも，かかる探究を充分期待させ得るだけの，大量の実態資料は，世界の学問によってすでに収集されているのである。

だが重要なことは明らかに原則上の問題なのであって，『形態論』に行き着いた方法とか，著者の，〔研究態度の〕推移とかなのではない。形式的研究を歴史的研究から分離することも，またそれらを対置することもできないのだ。本当はその逆なのだ，――研究対象たる資料の正確な体系的記述や，形式的分析は，歴史的研究の条件および前提であり，同時にその第一歩なのである。いわゆるフィンランド学派によってしきりに運用されている手順に従った，個々の結構の個別的検討に反対するいわれは何もない。しかしながら，こうすることによって，この派の代表者たちは，もろもろの結構の間に何らかの連関を推測することができないし，またかかる連関の存在や可能性があ

11) 伊訳，p. 193〔西訳，p. 39〕
12) 伊訳，p. 182〔西訳，p. 27〕
13) 伊訳，p. 184〔西訳，pp. 28f.〕
14) 伊訳，p. 184〔西訳，p. 29〕尚，《反歴史的》とあるは，《先史的》の間違いで，このことはレヴィ=ストロースの原文を見ればはっきりする。〔訳注〕

りはしないかと思うことすらしていないのである。こうしたことは，全体が種々雑多な部分の機械的な塊りと見なしている形式主義者たちの特徴的な方向である。この観点からすれば，われわれの場合，魔法民話なるジャンルは相互に遊離した，もろもろの結果の全体ということになる。逆に，構造主義者は，もろもろの部分は全体の諸要素として，しかも全体とそれらとの相関において，検討する。構造主義者は，形式主義者が，全体，体系を推測することができない場合にも，それを見てとるのである。『形態論』において練られた方法は，フィンランド学派——これは私見では，その長所にも拘らず，形式主義と批難されても致し方のないものである——がよく行っているようにもろもろの結構を別々に考察することによってジャンルを分断することはしないで，その代りに，そのジャンルを統一ある全体として，一体系として研究する可能性を提供しているのである。もろもろの結構の比較検討は，広範な歴史的展望を切り拓く。まず第一に，歴史的に説明され得るものは，個々の結構なのではなく，それらが属している構成的体系なのである。それから，それらの結構の間に介在している歴史的連繋が見出され，そしてこれとともに，それらの結構をまたも個別的に研究するための基盤ができるのである。

しかし形式的分析と歴史的分析との関係の問題は，諸相のひとつを表わしているに過ぎない。もうひとつは，形式と内容との関係の概念や，これらの種々な研究法によって設定された問題である。形式主義とは，普通には，内容を離れて形式を研究すること，と解されている。これに反して，レヴィ=ストロース教授によれば，形式主義的とは両者を対立させることの謂なのであり，そしてこの点では，かれは現在のソヴィェトの文学史家たちと相違してはいないのである。たとえば，構造的文学研究の最も活動的な代表者のひとり，ユー・エム・ロトマンは，いわゆる「形式的方法」の主たる欠陥は，それがしばしば研究者をして，文学を諸技巧の総体，機械的な塊りと見なさせるという点に存する，と書いている[15]。この上に更に形式主義者たちにとっては，形式はその自律的な諸法則を，しかも特に，社会史へ従属させられない内在的な発展法則を有するのだ，ということを付言できよう。この考えに従えば，文学創造の領域における発展は，自律的であり，形式の諸法則によって規定されることになる。

しかしこれが形式主義と解されるところのものであるとすれば，著者『民話』の形態論』は，たとえレヴィ=ストロース教授が私の唯ひとりの論敵であるどころではないにしても，形式主義的だと決めつけることは断じてできない。形式の研究が全部形式主義的である訳ではないし，また口碑芸術作品や造形美術作品の形式を討究する研究者が全員必然的に形式主義者である筈がない。

すでに一度，私は魔法民話の構造に関する私の結論が形式主義的観方，迷妄——une vision formaliste ——なりとする，レヴィ=ストロース教授の言葉を引用した。ここで問題なのは，たまたま口を滑らせた言葉なのではなくて，私も主観的な幻想の犠牲者だと見なしている (p. 21)[16] この論者の根強い信念なのである。私が沢山の民話からかって存在したことのないひとつの民話をでっち上げたのだということにされており，しかもこの民話は「多数の個々の民話が実在している客観的理由について何もわれわれに言うことができないほど，一般的で漠然とした抽象論」(p. 25)[17] なのである。レヴィ=ストロース教授が私の抽出した図式を名づけているとおり，私の抽象論が民話の多様性の原因を明らかにしないということは全くそのとおりであり，そして歴史的探究だけがそれをなし得るのであるが，さりとて拙論が空虚であり，全くの幻想だというのは正しくない。レヴィ=ストロース教授の言葉は，察するところ，単にかれが，私の研究の持つ，全く経験的，具体的な，特殊化された性格を理解しなかったのだ，ということを示しているだけである。どうしてそういうことが生じ得たのか？　レヴィ=ストロース教授はそれ自体では理解は，私の著書が困難だと考えている。多くの独自な考えを有する人びと

15) Ju. M. Lotman, *Lektsii po struktural'noj poetike*, Vyp. 1 : *Vredenie, teorija sticha* 〔『構造的詩学の講義』，分冊その 1，序論，韻文の理論』〕, in : ≪Učenye zapiski tartuskogo gosdarstrennogo universiteta≫, fasc. 160, *Trudy po znokovym sistemam*. I, Tartu, 1964, pp. 9-10 et passim. 〔ルーマニア語訳 (1970)，独訳(1971)も出ている〕。

16) 伊訳，p. 184〔西訳，p. 29〕

17) 伊訳，p. 188〔西訳，p. 33〕

は，他人の考えを理解し難いものであり，そして偏見を抱かぬ人びとには明瞭な事柄を了解しないものだ，ということが見てとれる。私の研究はレヴィ=ストロース教授の一般構想の中に入らないものであり，そしてここに誤解の原因のひとつがある。もうひとつの原因は，私の議論の進め方にある。私が本書を著わしたときは若かったし，そしてそのため，私はある意見や見解を公表するだけで，みんながこれを理解し同意してくれるには充分だと確信していたのである。それ故，あたかも私の考えが一目瞭然で解り易くなっているに相違ないものとして，これを詳しく論証したり敷衍したりするものを余計なことと判断し，ごく簡潔に処理して，定理の文体で私見を述べたのであった。だがこの点で私は間違ったのだ。

まず術語から始めると，«モルフォロギア»なる用語は，私にとって昔は非常に好きなものであったし，そしてこれはゲーテから借用されたものであったが，この用語は科学的な意味だけでなく，部分的には哲学的な，更には詩的な意味までも帯びているから，選択が宜しきを得ていなかったことを認めざるを得ない。真に正確を期待するには«モルフォロギア»について語られるべきではなくよりはるかに限定された概念，«構成»なる概念を採用すべきだったであろうし，従って，本書は『魔法民話の構成』なる題名を付すべきだったであろう。だが«構成»なる語もまた限定されねばならぬ。なぜならこの語は色々な風に解され得るからである。だから，われわれがここでそれをどのように使っているかを調べてみよう。われわれの分析は魔法や民話では種々な人びとが同一の行為を果たしたり，あるいは同じことだが，同一の行為が非常に異なったやり方で果され得るとの考察に，その起源を有することは，既述したところである。これは，迫害された継娘に関する民話群の異文のために明示したのであるが，しかしこの考察は，ある結構の諸異文にとってばかりでなく，魔法民話なるジャンルのすべての結構にとっても，有効なのである。たとえば，かりに主人公が何かを探しに家を出，そしてその望みの対象が非常に遠くにあるとすれば，かれは魔法にかかった馬の尻とか，鷲の背中とか，あるいはまた飛ぶ絨毯とか，飛ぶ船とか，悪魔の背中などに乗って目的とする物のところへ飛んで辿り着くことができる。ここでは，あり得べきすべての例のリストを作り上げることはしないでおこう。いずれの場合においても，主人公がその探究対象の存する場所へ移動することが問題になっているのだが，それが遂行される方法が異なっていることは容易に気付き得る。それ故，われわれは不変項と可変的な不定項とを有している訳である。別の例は，王女またはその父親のどちらかに気に入らぬため，求婚者のところに嫁ぎたがらぬ王女とか，彼女を嫁に出したがらぬ父親のそれである。この求婚者に次のような全く実現不能な試練が要求される，——王女の窓まで馬で跳び上がること，沸騰した湯の釜の中で入浴すること，王女の謎を解くこと，海の王の金髪を入手すること，など，不用意な聴衆には，これらの異文がすべて完全に異なっているように思えても，かれにはそれなりの充分な理由がある。しかし注意深い研究者にとっては，この多様性が論理的に規程し得る単一性として映ずるのである。最初の系列の例では，探究の場所への移動が問題だとすれば第二番目の系列では難題を課すというモティーフが表われている。これらの難題の性質は，相異なり，かつ不定であり，そして可変的なものを表わしている。だが難題を課しているということは不変的な要素である。私はこれらの不変的要素を，登場人物たちの機能と呼んだのであり，そして私の研究目標は，魔法民話の中にはいかなる機能が表われているかを確認したり，その数が限定されているか否か，またその機能がいかなる継起のうちに表われているか，を見定めることにあった。私の本の中では，まさしくかかる分析の諸成果が取扱われているのである。機能は余り数多くはなく，それらの形態は多様であり，それらの継起はつねに同一である，という結果になった。つまり，驚くべき規則性の図面が得られたのだった。（以下次号）

〔附記〕原文は V. Ia. Propp, Struttura e storia nello studio della favola, in : *Morfologia della fiaba* (con un intervento di Claude Lévi-Strauss e una replica dell'autore, a cura di Gian Luigi Bravo, Torino, Einaudi, 1966). 尚，C. Lévi-Strauss の Propp 批判については，

北岡誠司「フォルマリズムとフランス構造主義——プロップとレヴィ=ストロースとの〈対話〉を中心に——」(月刊『言語』, Vol. 3. No. 3 1974所収，大修館書店）があり，またプロップのレヴィ=ストロースへの反論については，拙稿「プロップのレヴィ=ストロースへの反論 ——『民話の形態論』をめぐって—— (『イタリア学会誌』, Vol. 23〈1975〉所収）を参照されたい。最近，大木伸一訳『民話の形態学』(白馬書房，1972) をめぐって，北岡誠司「柳田・昔話論からプロップ・形態論への転換を阻むもの——邦訳『民話の形態論』にみるプロップ誤読の根——」(『えうゐ』創刊号〈1975〉所収）という興味深い論考が出た。(1975・9・25)